実践のまとめ（小学校３学　社会科）

授業公開日　令和３年 10 月 20 日第５校時
授業者　南魚沼市立六日町小学校
教諭　栗田　明典

１　研究テーマ

問いを持ち追究する児童の育成

２　研究テーマについて

(1)　テーマ設定の意図

社会科は，社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えることが目標の１つである。決まった答えのない現代社会において，児童には，「どうしてそうなっているのか。」「何を解決しないといけないのか。」「誰のことを考えて解決する必要があるのか。」など，社会の現状に対する問いを持つ力が必要だと考える。唐木（2019）は，問題解決学習を通して，子どもが社会における自らの在り方・生き方を考えていく中で，その第一歩が問いを立てることであると述べている。

そのために社会科の授業では，社会的事象の中から問いを持ち，その問いを追究する力を付けたい。問いを持つとは，考えなくてはいけないことを児童自身が設定していくことである。ただの疑問ではなく，考えなくてはいけないことが問いである。追究するとは，問いに対し調べたり，話し合ったり，考えを練り上げたりして，問いの答えを見付けることである。問いは全員が同じであっても，追究の仕方は個人で異なることもある。問いの答えは，決まったものではなく，これから変化していくものであり，現状における最適解と考えたい。今の時点ではこれが一番よいのではないかという答えを見付ける力を育てたい。

(2)　研究テーマに迫るために

①　問いを設定する場面－授業の導入をどうするか－

できるかぎり児童の疑問から，授業で考える問いを設定する。例えば，前時の未解決の内容から始める，経験と現実のずれを生む資料を提示する，単元の学習問題の追究過程における疑問点などから問いを設定していく。なぜ（理由），どのように（方法），どちらが（選択），これから（持続可能性）などの問いが考えられる。

②　考えの交流場面－何を話し合うのか－

１時間の学習は，問いの設定－個人追究－意見交流，話合い－問いの解決（場合によって意思決定）の流れを基本とする。話合いでは，友達は何を根拠としているのか，どの視点から考えようとしているのか，その根拠や視点は問いの解決に対してふさわしいのか等を話し合い，問いの解決を目指す。考えを深めるために，声に出して自分の考えや根拠を伝え合いたい。「でも」「だって」「そうそう」などの会話が生まれる交流を目指す。

(3)　研究テーマに関わる評価

個人追究や意見交流を通して，問いに対して自分の考えを書く児童が 100％になる。
（ノートやワークシート）

３　単元と指導計画

(1)　単元名　　工場で働く人と仕事（小学社会３年　教育出版）

(2)　単元の目標

・地域の産業について，人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに，調査活動，具体的資料を通して，必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。【知識及び技能】

・地域の産業の特色や人々の生活との関連を考える力，社会に見られる課題の解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力，考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。【思考力・判断力・表現力等】

・社会的事象について，主体的に学習の問題を解決しようとする態度や，よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに，地域社会に対する誇りと愛情を養う。【主体的に学習に取り組む態度】

(3)　単元の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
① 生産の仕事は，地域の人々の生活と密接な関わりをもって行われていることを理解している。 ② 問いの解決に必要な資料を見付け，正しく読み取り，まとめることができる。	① 仕事の種類や仕事の工程などに着目して，生産に携わっている人々の仕事の様子を捉え，地域の人々の生活との関連を考えることができる。 ② 考えたことや社会への関わり方について選択・判断したことを適切に表現することができる。	① 生産の仕事について問いを見付け，自らの生活経験と関連付けて問いを追究し，解決しようとしている。 ② 生産の仕事と地域のつながりについて追究することを通して，地域への誇りや愛情を感じている。

(4)　単元と児童

①　単元について

本単元は，地域の生産の学習である。生産者が願いを持ち，それぞれの地域の特徴を活かし，安全性や効率性，持続可能性や付加価値など工夫して製品を作っていることを理解する。

教材は，まいたけの人工栽培を行う「雪国まいたけ」である。1980 年代後半，世界で初めてまいたけの人工栽培に成功し，その技術を使いエリンギやぶなしめじなどの生産も行う「プレミアムきのこ総合メーカー（HP より）」である。キノコ類の栽培の他にも，きのこのもつ機能性を追究し，消費者のニーズに応えるため健康食品等の開発も行う。他方，環境への配慮や最新 AI 技術の導入，外国での種の栽培等，持続可能な生産のために工夫を行っている。本社のある南魚沼市では，植林活動や地域の各種学校との連携など地域貢献活動も行っている。

単元前半（第 1 時～第 8 時）は「雪国まいたけのまいたけづくりにはどんな工夫があるのだろう。」という単元課題を設定し，まいたけ生産や社会貢献活動等，企業の工夫や努力について具体的な取組を調べる。コロナ禍により工場見学ができないため，働く人にインタビューを行う。働く人から直接話を聞くことで，企業の熱意を感じさせたい。単元後半（第 9 時～第 12 時）は雪国まいたけのよさを多くの人に知らせるためにどうしたらよいか，自分にできることを考える。児童が考えたアイデアを雪国まいたけの人に提案することで，活動への意欲を高めると共に，現状を踏まえた活動にしたい。

②　児童について（男子 14 名　女子 16 名　計 30 名）

学習に真剣に取り組む児童が多いクラスである。資料から数値や変化を読み取る力が高い児童が多い。反面，読み取ったことを根拠に自分の考えを表現することは難しい児童がい

る。「わたしたちの市の様子」の学習では，市の地図からどこにどんな場所があるか読み取ることができた。しかし，それらの情報を使って市を紹介するパンフレットを作成した際は，何を紹介したらよいか決められない児童がいた。

また，友達と関わり課題を解決したいという意識が高い。自力解決では解決が難しい，自分の考えがあやふや，自分の考えを友達に聞いてほしい，このような思いを持ち友達と関わってきた。友達と一緒に学習することで，全体として解決は図れるが，自分はどう考えたのか，児童一人一人が解決策を判断する力は十分ではない。

(5)　単元の指導計画と評価計画（全 12 時間　本時 9／12 時間）

	・学習内容 ◇提示資料	◎学習活動 問：問いの例	評価規準と方法【評価方法】 色付きは評価を残す
1	・まいたけの特徴。 ・人工生産が困難なまいたけの生産を初めて成功させた。 ・まいたけ以外の商品も生産。 ◇まいたけの特徴 ◇雪国まいたけ HP	◎人工生産が困難なまいたけの生産に成功したことを知り，雪国まいたけについて学びたいという意欲を持つ。 **問：「雪国まいたけについて何を考ええてみたいか。」**	主体的に学習に取り組む態度 雪国まいたけについて考えてみたいことを書いている。 【ノート】
2	・単元課題。 ・調べることや調べ方。	◎単元を通して追究する単元課題を設定する。 ◎単元課題を解決するために，何をどのように調べるか，単元の学習計画を立てる。	主体的に学習に取り組む態度 何を調べたらいいか，教科書を参考に友達と話し合い，調べることや調べ方を書いている。 【活動の様子】
	単元課題　：　雪国まいたけのまいたけづくりにはどんな工夫があるのだろう。		
	◇第 1 時の振り返り ◇教科書の学習計画（p.66）	**問：「まいたけづくりにどんな工夫があるだろう。」**	
3	・工場で決まった行程でまいたけを栽培している。 ・工場では仕事を分担している。 ◇まいたけの栽培の仕方（HP）	◎まいたけの栽培方法について調べ，工場の栽培工程をまとめる。 **問：「まいたけ工場では何をしているのだろう。」**	思考・判断・表現 工場では仕事を分担して，同じ栽培方法にすることで，安定して栽培していることを，図や言葉で表現している。【ノート】
4	・安全なまいたけを作り続けるための工夫。 ◇服装，品質管理（HP） ◇工場立地（HP）	◎安全な商品を作るために商品開発や安全性の確認などの工夫をしていることを調べ，まとめる。 **問：「どうしてみんな同じ服を着ているのだろう。」**	知識・技能 衛生に気を付けて，品質管理を徹底することで，安全な商品を作っていることが分かる。【ノート】
5	・製品の輸送や，原料の輸入など，他地域とのつながり。 ◇外国での種の栽培（HP） ◇販売の方法	◎南魚沼で作られた商品が全国に運ばれることや原料を外国から輸入していることを調べてまとめる。 **問：「商品はどこに運ばれるのだろう。」**	知識・技能 輸送の工夫，世界とのつながりが分かる。【ノート】盛況

6	・まいたけ生産について ◇働く人へインタビュー	◎インタビューを通して，今まで解決できなかった問いについて調べる。	知識・技能 まいたけ生産について理解を深める。【見学メモ】
7	・まいたけづくりにかける願い ◇創業者，歴代社長のまいたけ生産の願い	◎雪国まいたけはどんな願いをもって商品作りを行っているか調べて，まとめる。 **問：「なぜ，新しい商品を作り続けるのだろう。」**	知識・技能 まいたけづくりにかける願いから様々な商品が作り続けられていることを理解する。【ノート】
8	・企業としての社会貢献活動 ◇雪国まいたけの社会貢献活動（HP）	◎環境への配慮，社会や地域への貢献などについて調べ，まとめる。 **問：「まいたけづくり以外にどんな取組を行っているのだろう。」**	知識・技能 環境への配慮，社会や地域への貢献活動をしていることが分かる。【ノート】
9 本時	・雪国まいたけのよさ ◇これまでの学習での掲示物等	◎雪国まいたけはどんな会社か表現する。	思考・判断・表現 栽培や企業の取組を根拠に雪国まいたけはどんな会社か考え，表現している。【ノート】
10	・雪国まいたけのよさをたくさんの人に知ってもらうために自分たちにできること。 ・自分の解決策。 ◇これまでの学習での掲示物等	◎雪国まいたけのよさを広めるために自分たちができることを考える。 **問：「雪国まいたけのよさを広めるために，何ができるだろう。」**	主体的に学習に取り組む態度 新たな学習問題を設定したりその予想をしたりするために，進んで考えたり，話し合ったりしている。【活動の様子】
11	・雪国まいたけのよさを伝えるアイデアを提案する。	◎個の考えをグループで検討し，雪国まいたけのよさを伝えるアイデアを実現する活動を行う。	思考・判断・表現 雪国まいたけのよさを，ポスターや手紙などで伝えている。 【作成したもの】
12	・雪国まいたけへ提案する。	◎グループで作成したものを雪国まいたけの人へ提案する。	主体的に学習に取り組む態度 雪国まいたけのよさを進んで伝えている。【活動の様子】

4　本時の展開

(1)　ねらい

雪国まいたけのキャッチフレーズ作りを通して，まいたけ生産や社会貢献活動等の取組を根拠に，会社のよさを表現することができる。

(2)　展開の構想

児童はこれまで，まいたけ生産の方法や工夫，まいたけ以外の多様な商品の販売，地域社会への貢献活動や環境への配慮など，雪国まいたけの取組を学んできた。これまでの学習内容を根拠として，雪国まいたけにふさわしいキャッチフレーズを考える本時の活動は，事実を踏まえて問いの答えを見付ける態度へつながる。なお，キャッチフレーズは本来「強い印象を与える言葉」の意味で使われることが多いが，本時では児童が考えやすいように「会社を紹介する言葉」と捉える。

本時の意見交流場面は，個々のキャッチフレーズを紹介し，その理由を伝え合う。その上

で，友達のキャッチフレーズか雪国まいたけの取組を踏まえたものかどうかという視点で聞き合う。ペアまたはグループ，全体での意見交流を踏まえ，自分のキャッチフレーズを作り直す。また，本時はZoomで雪国まいたけの方にも参加してもらい，終末で児童が考えたキャッチフレーズに対してコメントをしてもらう。実際に働いている方の声を聞くことで，児童が社会の現実の立場から自分の考えを見直したり，雪国まいたけへの愛着を深めたりするため，Zoomを活用する。

(3)　展開

時　　間 （分）	・学習活動	○教師の働き掛け ●予想される児童の反応	□評価　○支援　◇留意点
導入 (10分)	・今までの学びの想起	○これまでどんなことを学んだか想起させる。 ●様々なきのこ商品を作っている。 ●地域のために取組をしている。	◇単元1時間目に比べて雪国まいたけについての知識が増えたことを板書で可視化する。
	・キャッチフレーズへの意識化	○「安心を，安全を。雪国まいたけ」のキャッチフレーズは，雪国まいたけを紹介できているか問う。 ●安心，安全は確かにそうだ。でも，それ以外の取組もしているな。	○他社のキャッチフレーズを例示し，キャッチフレーズが会社を紹介するものであることを認識させる。
	・問いの設定	○本時の問いを立てる。	
	雪国まいたけをしょうかいするキャッチフレーズをつくろう。		
展開 (27分)	・雪国まいたけの取組の振り返り	○雪国まいたけの取組について，これまで学習した内容を振り返る。	○根拠となる事実は教室に掲示しておく。
	・自力解決	○雪国まいたけの取組を踏まえたキャッチフレーズを考える。	
	・意見交流	○ペアまたはグループで考えを交流する。	◇ペアやグループで交流した後，数名が板書し考えを共有する。 □雪国まいたけの取組を根拠にキャッチフレーズを表現している。 （ワークシート）
まとめ (8分)	・雪国まいたけの方との交流 ・振り返り	○雪国まいたけの方の話を聞く。 ○本時のめあてに対して学んだことや思ったことを書く。	○Zoomで雪国まいたけの方からコメントをもらう。

(4)　評価

雪国まいたけの取組を根拠に，キャッチフレーズを表現している。（ワークシート）

５　成果と課題

（1）　本実践の成果

①　本物との出会いによる学習意欲の向上

コロナ禍において工場見学が難しい現状がある。しかし，社会的事象に直接関わる機会を設けることは，学習意欲の向上にとって大切である。本実践では，雪国まいたけの物産館に行き，生産の様子をＤＶＤで見たり，エリンギやまいたけの収穫体験をしたりした。この経験をしたことで，雪国まいたけが安心安全な生産を目指していることや安定した出荷に努めていることを理解することができた。また，収穫体験をすることで雪国まいたけへの愛着を高めることにつながった。この経験を全員で共有できたことで，第 9 時のキャッチフレーズ作りや第 11 時の雪国まいたけのよさの提案にどの児童も取り組むことができた。第 11 時の雪国まいたけのよさの提案では，8 つのグループのうち 7 つのグループで見学して分かったことを生かして提案の内容を書く様子が見られた。

第 9 時では，Zoom で雪国まいたけの人に参加してもらった。キャッチフレーズ作りを見ていただき，できたキャッチフレーズにコメントをしてもらった。児童が自分なりに一生懸命考えたことを，相手から認めてもらうことで，授業の達成感や雪国まいたけへの愛着の高まりにつながった。また，作ったキャッチフレーズを学校外へ発信したいという新たな意識へつながった。

☆児童が考えた雪国まいたけのキャッチフレーズ☆
「安心安全な　おいしいきのこを　届けます」　「世界中によろこび　笑顔を」
「口にしたくないきのこはつくらない」　「高価なきのこも　手軽に」
「安心安全なおいしいきのこで　みんなを笑顔に　そして自然づくりも」

②　発信する具体的な場の設定による学習内容の理解の充実

第 9 時で作ったキャッチフレーズを発信したいという意欲を基に，雪国まいたけのよさを伝える活動を行った。児童主体で活動を進められるように，誰に対して，どんな方法で伝えるかを全員で話し合った。発信という目的が明確なため，話合いでは，発信する方法としてポスターや町内の回覧板，校内放送やチラシ，保護者への手紙，ホームページへの掲載の 6 種類の方法が出た。その中からグループで実現可能なものを選び，活動を進めた。

ポスター（図 1）を作ったグループは，個々に考えたキャッチフレーズをグループで再考し，よさが伝わる言葉を選び直した。その話合いの中で，どの言葉がより雪国まいたけのよさを伝えられるか，見学や学習した事実を理由に話し合う様子が見られた。

回覧板（図 2）の文章を作ったグループは，グループの 1 人 1 人が考えた雪国まいたけのよさを大人に読んでもらうという意識で文章にまとめた。見学メモを基に具体的な事実を書いていた。

発信するために，何を伝えたらよいか学習した事実の中から内容を話し合うことで，学習内容の理解に加えて雪国まいたけへの愛着も深まった。

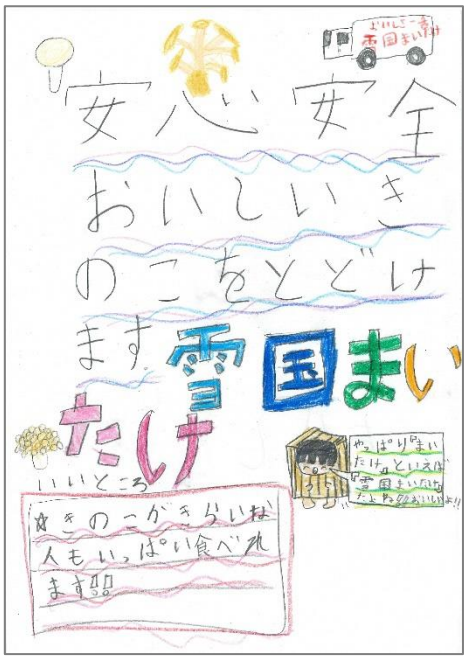

図１　ポスター

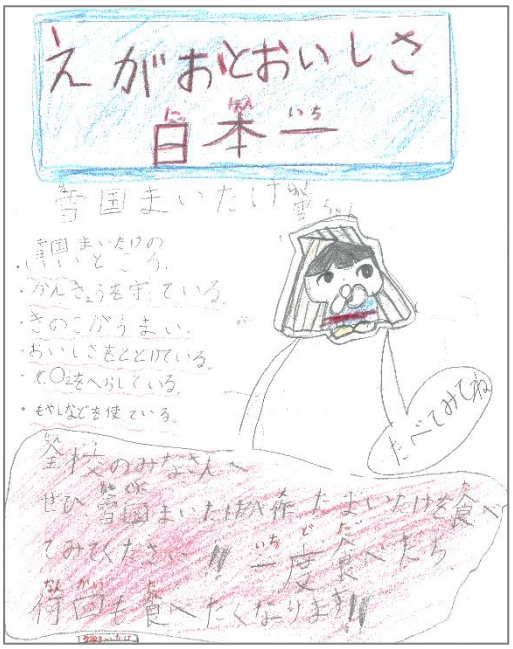

図２　回覧板

（2）　本実践の課題

①　単元課題を解決する単元づくり

本単元では，単元課題を第２時で設定した。しかし，その課題解決を児童が意識して単元の学習を進めたとは言えない。それぞれの授業では，写真や実物の提示，見学での疑問などを基に，児童と共に問いを設定し学習を進めた。児童と共に問いを設定することで，１時間１時間の授業において意欲的に追究する姿が見られた。一方，それぞれの授業が単元課題の解決につながっていなかった。第８時の企業としての社会貢献活動を調べる学習は，まいたけづくりとは関連しない活動もあり，雪国まいたけという企業への理解は深まったが，単元課題とは離れていた。

児童が単元課題を解決するために問いを設定し，学習に取り組むために，単元の構想を工夫する必要がある。例えば，単元の途中で振り返り，単元課題の解決のために何がまだ分らないのか見直す時間を入れるのも一つの方法である。また，児童が単元課題の解決を意識して学習を進めるには，繰り返し単元課題を解決する経験をすることも必要である。１年間の社会科において，単元課題を解決する単元づくりを継続して行っていく。

②　どの児童も考えを持つための支援

第９時のキャッチフレーズ作りでは，30 名中２名の児童が考えを持つことができなかった。第９時では，「ヒントとなる言葉を板書する」「友達と話し合う時間を取る」「友達の考えたキャッチフレーズを板書する」支援を行った。このような多様な情報からヒントを得て考えを持つ児童もいたため，必要な支援であったが，多様な情報を処理しきれない児童もいた。その児童のノートや見学メモを一緒に振り返り，その子が持つ情報を使ってキャッチフレーズを考えさせる個別の支援が考えられる。

多様な支援をしないとできない活動は，その活動自体が児童の実態と合っていない場合もある。キャッチフレーズ作りは国語の学習で経験していたため，本実践でも可能であると判断した。しかし，国語は自分が参加する学習発表会のキャッチフレーズ作りであったのに対し，社会科は自分が経験していない雪国まいたけという企業のキャッチフレーズ作りであった。本実践のように，児童にとって新たな社会的事象に関わる学習の際は，児童から必要感や必然性が出てくるように単元の学習を進める必要があった。

【参考文献】

唐木清志（2019）:「リアルな問い」を設計するための五つの条件．社会科教育．726 号．pp.8-11.